

中津城下町遺跡24次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

中津市教育委員会

序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての新たな側面を見せはじめています。

一方、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ影響を与えていることも事実です。本年度は公共工事に伴う発掘調査を行っており、県道拡幅に伴う発掘調査も大分県教育委員会により行われておりま

す。本書はこうした開発の中で、中津城下町遺跡において平成25年度に行われた集合住宅建設に先立つ発掘調査の報告書です。調査により江戸時代の水道遺構などが発見されました。本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護や活用への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました有限会社昭栄産業取締役川島英子様・川島圭司様をはじめ、調査に従事して下さった方々に対し深甚から感謝申し上げます。

令和3年3月19日

中津市教育委員会
教育長 粟田 英代

例 言

1. 本書は大分県中津市教育委員会が平成25（2013）年度に実施した中津城下町遺跡24次調査の発掘調査報告書である。
2. 確認調査は浦井が担当した。本調査は有限会社昭栄産業より委託を受けた中津市教育委員会が行い、荻と浦井が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、平成26～31、令和2年度に実施し、遺物は旧東谷小学校にて保管している。
4. 遺物の洗浄・注記・実測・拓本・浄書・観察表作成等は、旧今津公民館・旧和田公民館にて行い、整理作業員の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は浦井が担当した。

目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の成果	5
第4章 総括	13
写真図版 報告書名抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 中津市内主要遺跡分布図	4
第3図 遺構配置図・土層図	7
第4図 S-2・3・4・5・6平面図、S-3土層図、S-3木柵	8
第5図 S-7・10平面図、S-10土層図	9
第6図 S-1・2出土遺物	10
第7図 S-2出土遺物	11
第8図 S-2・3出土遺物	12
第9図 S-3出土遺物	13
第10図 S-5出土遺物	14
第11図 S-5出土遺物	15
第12図 S-7出土遺物	16
第13図 S-7出土遺物	17
第14図 S-7出土遺物	18
第15図 S-6・7出土遺物	19
第16図 御水道の分布	20

表目次

第1表 出土遺物観察表	21
第2表 出土遺物観察表	22
第3表 出土遺物観察表	23

写真図版目次

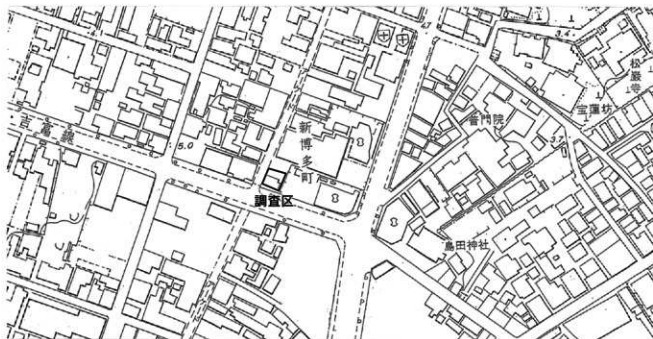
写真図版1 調査区全景	
写真図版2 S-1・2・3・6	
写真図版3 S-3検出状況 S-3完掘状況 S-3木柵①と石	
写真図版4 S-3木柵② 南北ベルト東壁 S-6竹管跡・完掘状況 S-7完掘状況 S-10	
写真図版5 遺物写真	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成25年4月25日、中津市字新博多町1720番1外地内の埋蔵文化財包蔵の照会がなされた。照会地は中津城下町遺跡である旨回答し、平成25年12月20日、施主より文化財保護法第93条第1項の届出が提出された。これを受けて平成26年2月13日に確認調査を実施し、設定した4か所すべてのトレンチから遺構・遺物が検出された。施主へ工法変更による遺構の保存について協議したが、工法変更は困難との結論に至り、遺跡を記録保存するための本調査を行うことが決定した。2月20日、施主と中津市長名にて発掘調査委託契約等を締結し、2月24日から3月14日まで本調査を実施した。

調査の結果、土坑4基、水道遺構2条などを確認した。平成26年度より報告書作成作業を開始した。作業は施主の要望により工程を複数年度に分割して実施し、令和3年3月の本書刊行をもって本事業を完了した。



第1図 調査区位置図

第2節 調査の組織

平成25年度(2013)年度

中津市教育委員会 教育長
" 教育次長
" 文化財課長
" " 係長
" " 主任
" " 嘱託

廣畑 功
井上 信隆
川西 州作
高崎 章子
浦井 直幸(調査担当)
荻 幸二(")

平成26年度(2014)年度

中津市教育委員会 教育長
" 教育次長
" 文化財課長
" " 主任研究員兼文化財係長
" " 主任

廣畑 功
後藤 義治
今津 時昭
高崎 章子
浦井 直幸(整理担当)

平成 27 年度 (2015) 年度					
中津市教育委員会	教育長		廣畑 功		
"	教育次長		白木原 忠		
"	文化財課長		平原 潤		
"	"	主任研究員兼文化財係長	高崎 章子		
"	"	副主任研究員	浦井 直幸 (整理担当)		
平成 28 (2016) 年度					
中津市教育委員会	教育長		廣畑 功		
"	教育次長		白木原 忠		
"	社会教育課長		高尾 良香		
"	"	文化財室長	高崎 章子		
"	"	主幹	花崎 徹		
"	"	副主任研究員	浦井 直幸 (整理担当)		
平成 29 (2017) 年度					
中津市教育委員会	教育長		廣畑 功		
"	教育次長		白木原 忠		
"	社会教育課長		高尾 良香		
"	"	文化財室長	高崎 章子		
"	"	主幹	花崎 徹		
"	"	副主任研究員	浦井 直幸 (整理担当)		
平成 30 (2018) 年度					
中津市教育委員会	教育長		廣畑 功		
"	教育次長		粟田 英代		
"	社会教育課長		高尾 良香		
"	"	文化財室長	高崎 章子		
"	"	主幹	花崎 徹		
"	"	副主任研究員	浦井 直幸 (整理担当)		
平成 31 (令和元、2019) 年度					
中津市教育委員会	教育長		粟田 英代		
"	教育次長		大下 洋志		
"	社会教育課長		高尾 良香		
"	"	文化財室長兼歴史博物館長	高崎 章子		
"	"	主幹兼歴史博物館副館長	花崎 徹		
"	"	副主任研究員	浦井 直幸 (整理担当)		
令和 2 (2020) 年度					
中津市教育委員会	教育長		粟田 英代		
"	教育次長		大下 洋志		
"	社会教育課長		岩丸 祐子		
"	"	歴史博物館長	高崎 章子		
"	"	副館長兼主幹	花崎 徹		
"	"	副主任研究員	浦井 直幸 (整理担当)		

発掘調査は下記の皆さんの協力による。(50 音順、敬称略)

石塔美代子 今木功一 今永夏樹 太田博泰 奥中廣雪 小野照行 小野礼子 川口政代
宮津しのぶ 若木和実

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約8万4千人、面積491km²を誇る。北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。英彦山に源を発する一級河川山国川が市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝那馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。中津城下町遺跡は山国川の支流中津川河口に位置する。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 市内の遺跡を概観すると旧石器時代の石器は才木遺跡(35)や法垣遺跡(19)で発見されている。

縄文時代 上畑成遺跡(43)で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡(18)で陥し穴が発見された。遺跡数は縄文後期から増大し、植野貝塚やボウガキ遺跡(21)、妊婦像の土偶が出土した高畑遺跡がある。法垣遺跡は複数の掘立柱建物が検出され注目されている。

弥生時代 前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡(13)で野蔵穴群が確認された。続く中期では二列埋葬の土壘墓・住居跡・溝が福島遺跡(25)で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡(28)で検出された。

古墳時代・古代 亀山(亀塚)古墳(58)が挙げられ、近年の調査により埴輪片が出土している。その他の墳墓の多くは下毛原台地の南西に造営される。5世紀中頃には山国川に面する勘助野地遺跡(12)で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓(11)が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群(29)、城山古墳群(34)、城山横穴墓群(33)などが見られる。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡(7)で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡(45)や定留遺跡(47)でまとまって発見されている。古代には7世紀末に百済系の相原廃寺(6)が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制(4)が施行されたと考えられ、条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。8世紀後半には官道南側に下毛郡正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡(20)が確認された。須恵器や瓦を製作した生産遺跡は、草場窯跡(37)、踵ヶ迫窯跡(38)、洞ノ上窯跡などがある。集落遺跡としては10世紀代の緑釉陶器や墨書土器が出土した三口遺跡がある。

中世 長久寺の田丸城跡(24)など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城(1)が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世 関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632(寛永9)年に完成を見る(2)。1717(享保2)年に奥平氏が入部し、1871(明治4)年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城跡 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場竈跡 | 49. 和開貝塚 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踵ヶ迫竈跡 | 50. 定留鬼塚遺跡 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畑遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池竈跡 | 51. 足能遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷竈跡 | 52. 田尻大迫遺跡 |
| 5. 高畑遺跡 | 17. 加米居屋敷遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 舞手橋東段上遺跡 |
| 6. 相原庵寺 | 18. 黒水遺跡 | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 足開遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 法垣遺跡 | 31. 洞ノ上空跡 | 43. 上畑成遺跡 | 55. 全徳遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷官街遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 諸田南遺跡 | 56. ガラスノ遺跡 |
| 9. 坂手隈城跡 | 21. ホウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 諸田遺跡 | 57. 合馬遺跡 |
| 10. 弊殿邸古墳 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 天貝川遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 定留遺跡 | 59. 東浜遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 田丸城跡 | 36. 城山竈跡群 | 48. 定留貝塚 | 60. 三口遺跡 |

第2図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

確認調査は計4本のトレンチを設定し実施した。その結果、すべてのトレンチから土坑や溝状遺構を確認し、陶磁器片が出土した。

本調査は建物建設範囲のうち80㎡を対象とし、重機により掘り下げを行った。遺構密度は高く、調査区北半は近代の攪乱も見受けられたが遺構の残存状況はおおむね良好であった(第3図)。遺構検出面の標高は約4.5m。調査区南東端にて火災処理土坑(S-7)や調査区中央を横切るように水道遺構(S-3・6)を検出した。水道遺構からは竹管や木樹が出土している。各遺構の年代は18世紀後半～19世紀前半代が中心と考えられるが、17世紀前半代の遺構も確認している。遺物はバンケース7箱分が出土した。

第2節 調査の成果

S-1 (第3・6図)

調査区北端で検出した。四角柱の切石を東西方向に長さ9.3m、幅30cmの範囲で2列並べ置いている。北と東西は調査区外へ延びる。南列の切石は幅20cm、長さ100cm、高さ15cmである。北列切石の幅は不明であるが長さ60cm前後、高さ15cmを測る。南列の切石の下には人頭大の川原石が敷かれている。東端部の川原石が表出する部分が切石が後世に抜かれた痕跡と思われる。切石南側は小円礫を含んだ固く締まる層があり、その下層にも小円礫や人頭大の川原石を多数検出している。南側切石下の川原石は沈下防止の役割を果たしたと考えられ、上部には重量物である建物の柱、もしくは壁が構築されていたと思われる。切石南側で検出した礫層については切石の栗石層もしくは雨落ち溝と考えられる。南列の切石に比して北にそれより小さな切石を並べていることから、北側に建物の内構造があった可能性を想定しており、その空間は切石敷きであった可能性がある。南側切石下の川原石は一部被熱しており、切石上に建つ建物が火災にあったことを示す。

遺物は18世紀後半以降の所産の磁器皿・碗、挿鉢(1～3)が出土している。

S-2 (第4・6・7・8図)

調査中央北よりで検出した。最大長5.7m、最大幅3.2mを測る。表面に焼土・墨が表出していたが、明確な立ち上がりは確認できなかった土坑である。S-1や後述のS-7と共に火災に関係する遺構と考えられる。

遺物は18世紀後半以降の磁器皿・碗・火入れ・香炉、陶器鉢・挿鉢、土師質土器の灯明皿などが出土している。19は菊花文を型押しする器種不明の遺物。20は陶製の獅子の尾。27は金属製の匙。28は碗型滓。銅滓であろうか。29はガラス製品。30は石臼。茶臼と思われる。

S-3 (第4・8・9図)

調査中央南よりで検出した水道遺構である。長さ9.3m、最大幅65cmを測る。主軸の方位はN-64°-Wである。第3図調査区東壁16・26層が埋土であり、遺構の深さは2mを測る。後述するS-7を壊して構築される。遺構は途中、幅30cmの土橋状の空間があり、第4図土層図を見ると土橋部は整地層か自然堆積層か不明な層態であるが、その下は深さ75cm程度トンネル状にくり抜かれている。遺構の底面には径9～11cmの竹管が腐朽した状態で遺存しており、土層断面にも明瞭に痕跡を残す。

竹管の東と西側にて木樹を検出した。西側の木樹①は長さ45cm、幅42cm、高さ33cmの直方体である。

長軸側の側壁板に径11cmの孔があり、竹管が差し込まれている。木柵の上には上面中央部を削り残した砂岩製の大石が蓋石として置かれていた。大石は長径47cm、幅41cm、高さ20cmを測る。木柵②は長さ45cm、幅43cm、高さ40cmの直方体である。長軸側の側壁板に竹管を差し込む径9cmの孔があり、同じ面に側壁同士を繋げる釘が左右各4ヶ所に打ち込まれている。蓋石は検出されていない。

木柵①と②の距離は約6m。木柵は常に水の湧く灰色粘質シルト層を半月形状に掘り込み埋置されている。竹管はこのシルト層上面に接するように置かれている。腐朽防止のため湧水するシルト層上面や層内に木柵や竹管を埋置したものと考えられる。また木柵②下位に接する位置にこぶし大の川原石が出土している。木柵の固定を目的として設置された可能性がある。

遺物は18世紀後半以降の磁器碗・皿・猪口・瓶、陶器瓶・碗・播鉢、土師質土器や土錘、軒丸瓦、壁の部材が出土し、8世紀中頃の須恵器も1点出土している。35は五弁花のコンニャク印判を施す。37は外底部に「大明年製」の銘あり。

S-5 (第4・10・11図)

調査中央北よりで検出した。最大幅2.2m、深さは記録ミスにより計測できていない。遺物は18世紀以降の磁器皿・小杯・碗・蓋、陶器甕・立・鉢・播鉢、瓦質土器火鉢や土師質土器焔炉が出土している。48・50は見込みに一筆書き状の銘が認められる。55は底部に墨書がある。57は火入れか。へら状工具で縦方向に線刻を施し、各線間に横方向の線刻を施す。

S-6 (第4・15図)

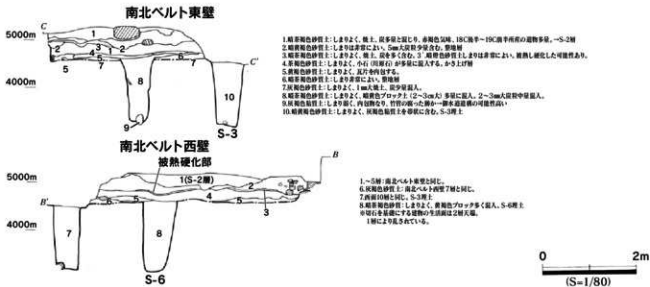
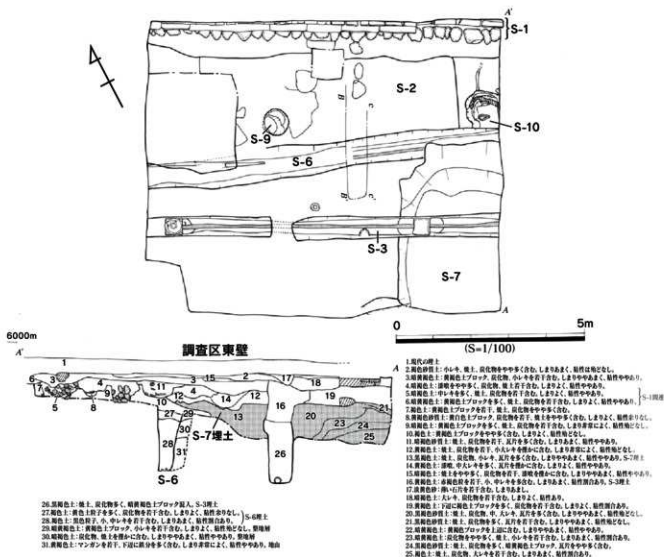
調査中央で検出した水道遺構である。長さ9.3m、最大幅85cm、深さ1.3～1.5mを測る。主軸の方位はN-70°-Wである。S-3同様断面は箱型を呈し、遺構中央から東は3.8mの長さで底面に腐朽した竹管が出土した。竹管内に内包物はない。中央から西は竹管がやや北寄りに部分的に遺存し、西端部では底面の北端で出土している。本来竹管は底面中央に設置され木柵と木柵を繋ぐものであるが、それが北寄り出土していることは、水道機能停止後に動かされたものと推定する。S-3との距離は、西端で80cm、東端では1.7mを測る。S-3とは6°の開きがある。

遺物は少量出土した。105は肥前系溝鉢皿。1600～1630年代の所産。107は磁器碗。初期伊万里と考えられる。

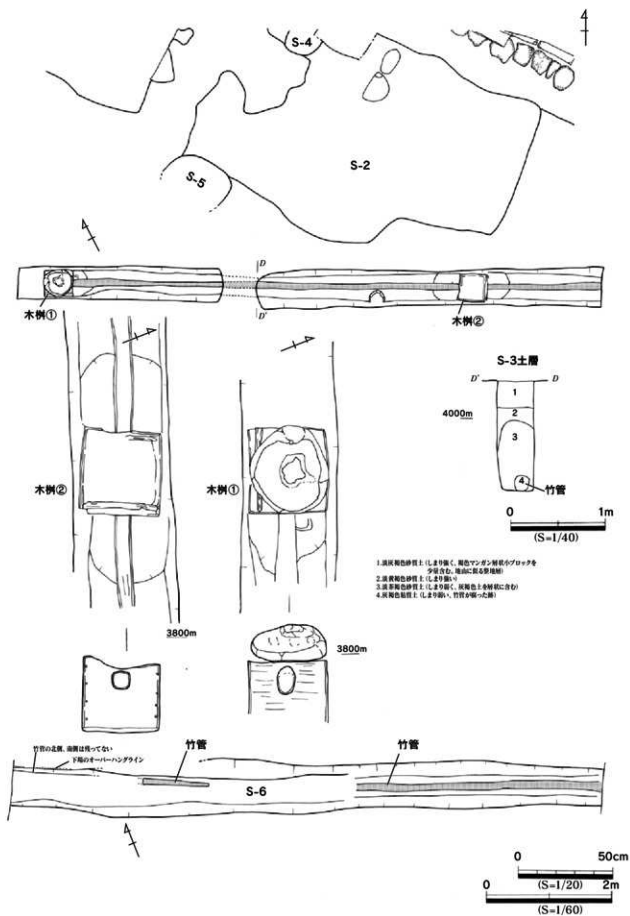
S-7 (第5・12～15図)

調査南東端で検出した。最大長さ4.5m+α、最大幅2.8m+α、深さ50cmを測る。埋土はしまりの弱い黒褐色砂質土で焼土・炭化物を大量に含み、陶磁器や瓦片が多く含まれていた。北端はS-6と重複しS-7の方が新しい。遺構は黄褐色の地山を播鉢状に浅く掘りくぼめて構築され、火災により生じた土器などの廃棄物をそこへ遺棄している。遺構が埋まった後はS-3が構築され、底面に木柵や竹管が設置された。

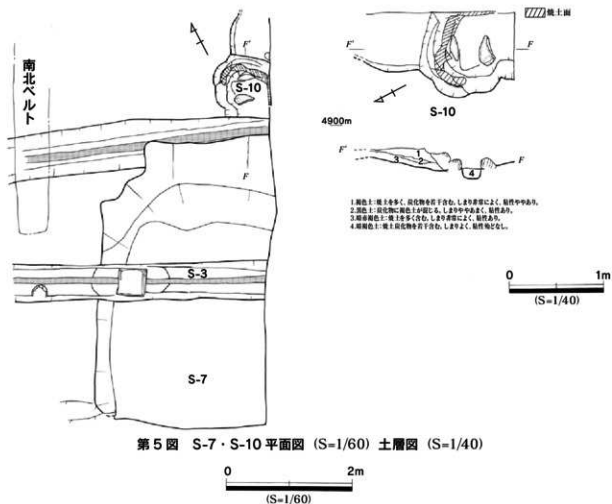
遺物は一部17世紀代を含むがほとんどが18世紀後半以降の所産である。磁器小杯・皿・猪口・蓋・火入れ・瓶、陶器碗・瓶・皿・鉢・片口・播鉢・甕、土師質土器皿、瓦、礫石などが出土している。65は見込みに甲骨文字を描く。68は雨降り文を描くが簡略化されている。87は陶器の蓋。大小の円孔あり。99は鬼瓦。中央部紋様は欠けるが放射状に線刻が認められる。裏面は縦方向に把手が付けられる。



第3図 遺構配置図 (S=1/100) 土層図 (S=1/80)



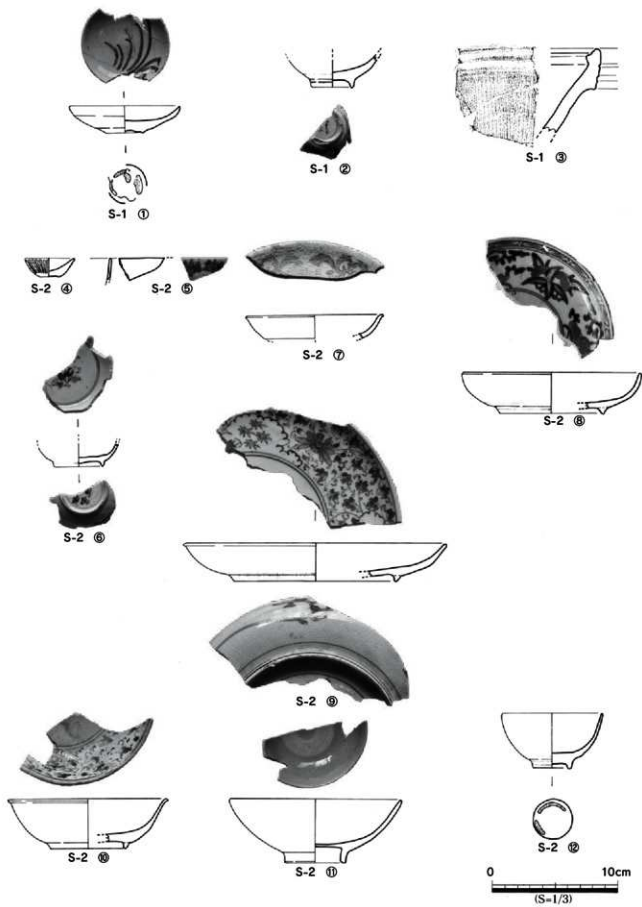
第4図 S-2、3、4、5、6平面図 (S=1/60) S-3土層図 (S=1/40) S-3木柵 (S=1/20)



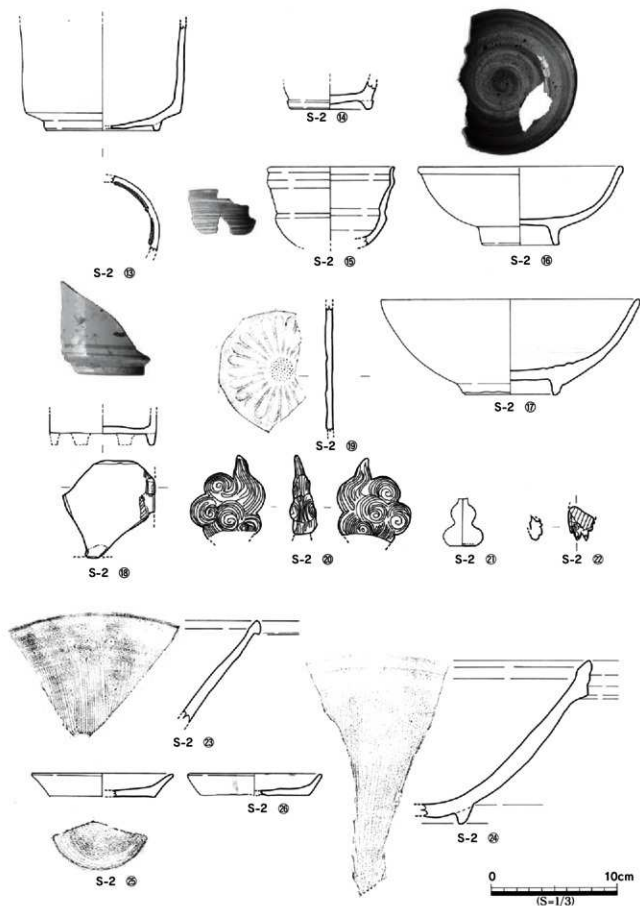
第5図 S-7・S-10 平面図 (S=1/60) 土層図 (S=1/40)

S-10 (第5図)

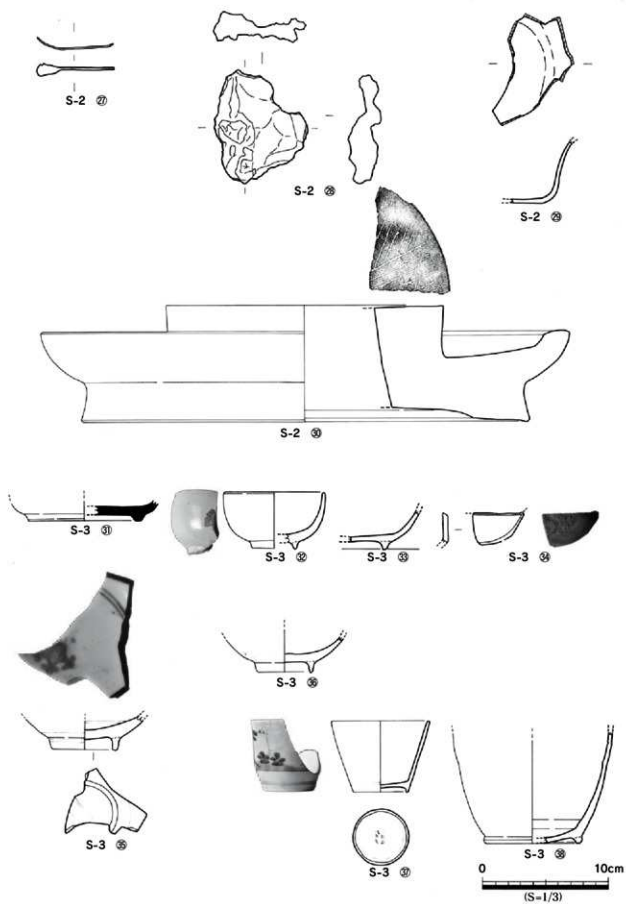
調査中央東端で検出した土坑である。長さ100cm、幅90cm、深さ30cmを測る。遺構中央に長さ10～15cmの被熱した川原石と石材種不明の石2点が埋置された状態で出土した。遺構は北半側の被熱が著しく、火を焚く行為が行われたことは間違いない。これらの状況から本遺構は鍛冶遺構である可能性が高く、埋め置かれた石は金床石であると思われる。遺物は磁器や陶器の小片が少量出土するにとどまり、遺構の時期の特定には至っていない。ただしS-6に切られる重複関係のため、それより古い時期の遺構であると思われる。



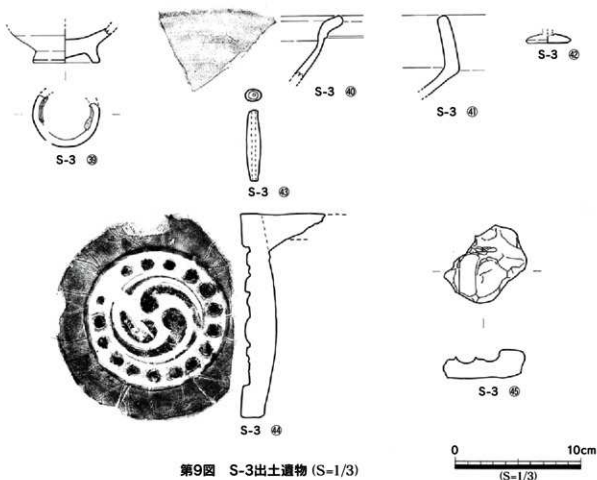
第6図 S-1、S-2出土遺物 (S-1/3)



第7図 S-2出土遺物 (S=1/3)



第8圖 S-2・3出土遺物 (S-1/3)



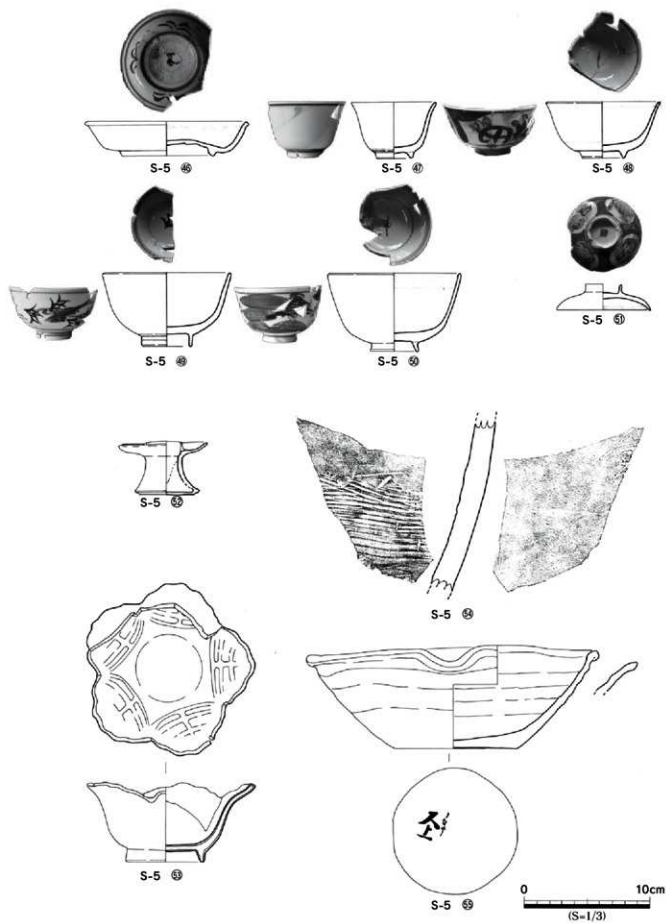
第9図 S-3出土遺物 (S-1/3)

第4章 総括

今回の調査は約80mという狭い調査区であったが、多くの情報を得ることができた。遺構の状況をまとめると最も古い遺構はS-10と考えられ、次に17世紀前半のS-6(水道遺構)、18世紀後半以降のS-1・2・3・7が続き、S-2が最も新しい遺構とみられる。

今回の調査で確認された水道遺構(S-3・6)は、「御水道おみずどう」と中津では呼称される。17世紀初頭、細川忠興は城下の用水確保のため城内に山国川の水を引き込んだとされ、その後入部した小笠原氏も承応元年(1652)、樋管を延長して町中に疎通した。幹線は道路の中央に石樋を敷設し、竹筒は各家に引き込むための支線と想定されている(中津市2004)。御水道の名称は敷設・管理する権力者を敬う表現として「御」を冠し「御水道」と呼称すると思われ、旧城下町の総構の土塁も「おかこい山(御囲山)」と呼称されている。

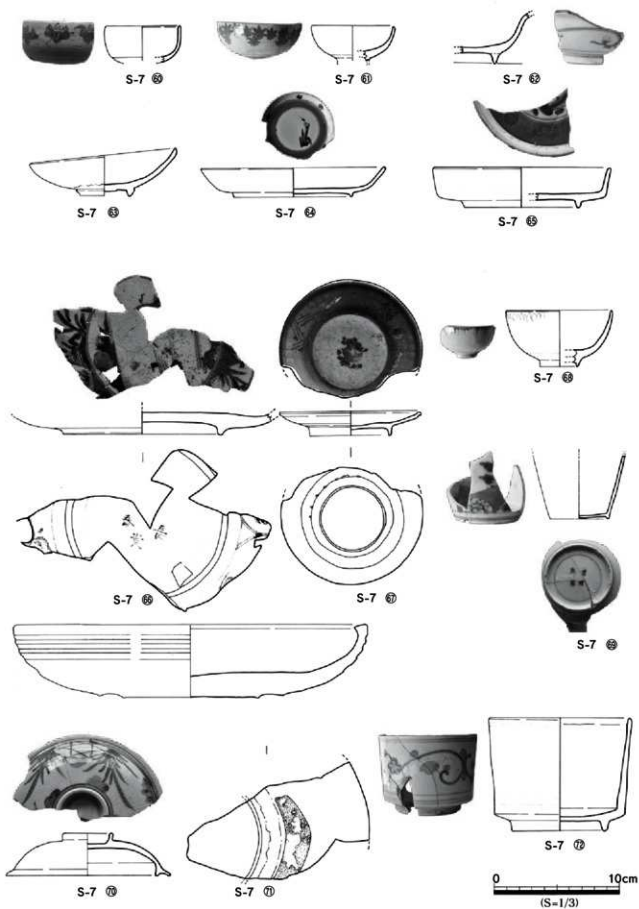
今回確認した17世紀前半のS-6は細川時代の御水道の支線と考えられる。その後、18世紀後半頃に本調査地点を含む一帯が火災に見舞われ火災処理土坑S-7などが構築された。水道遺構S-3はその火災処理後の整地面から構築され、木樹や竹管が出土している。



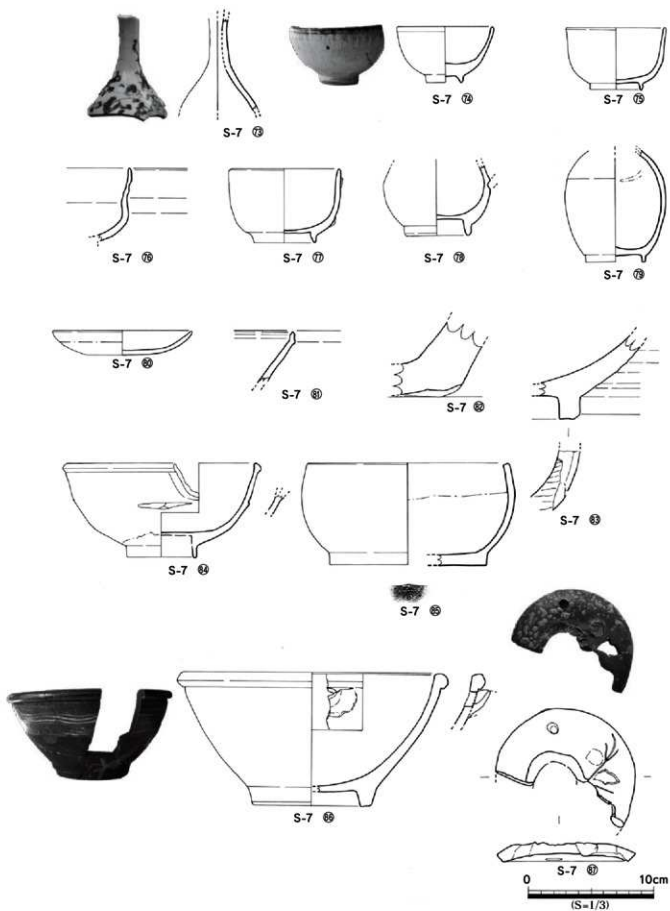
第10圖 S-5出土遺物 (S=1/3)



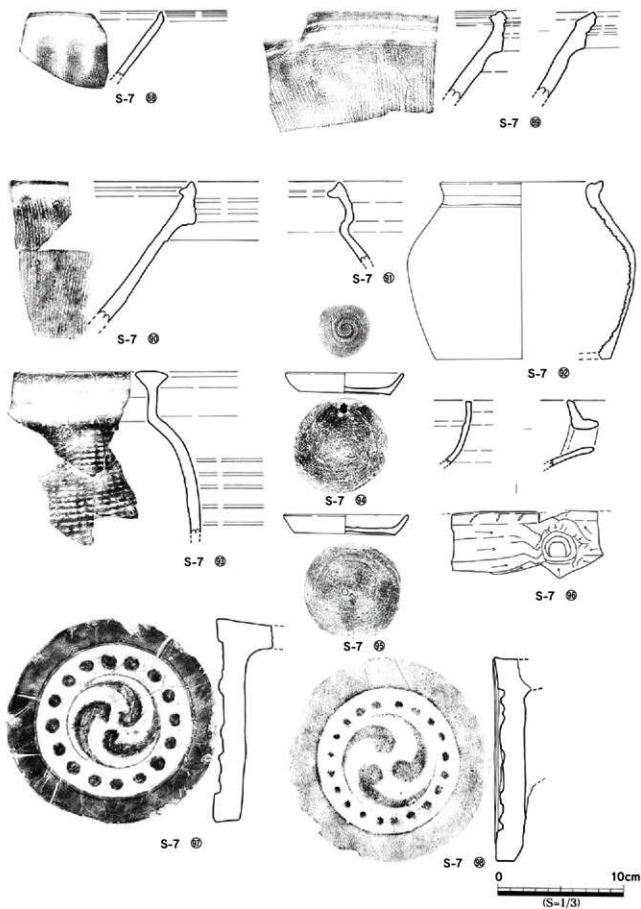
第11圖 S-5出土遺物 (S-1/3)



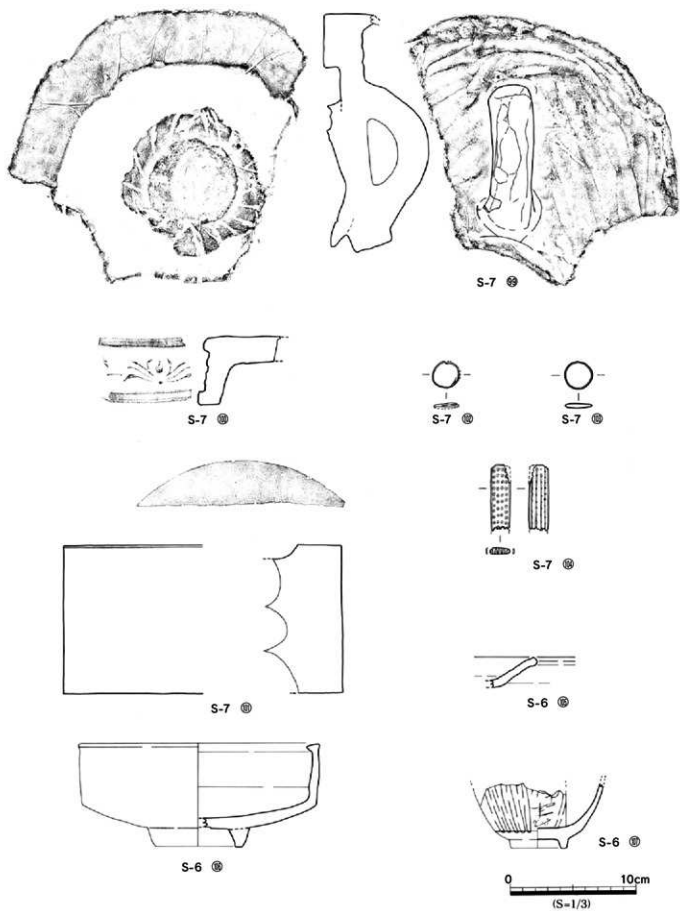
第12圖 S-7出土遺物 (S=1/3)



第13圖 S-7出土遺物 (S=1/3)



第14圖 S-7出土遺物 (S-1/3)



第15圖 S-6、S-7出土遺物 (S-1/3)

S-6が17世紀前半に埋没していることから、幹線と比べて支線は一度構築されたら永続的に利用されるのではなく、屋敷や町屋の拡張などの理由により廃止される例が存在したことがわかる。利用された幹線は距離的にみて西側の京町筋のものと考えられる。S-3とS-6の西端部の間は1mに満たないことから、その延長線の交点に幹線の取り入れ口が存在する可能性があり、幹線の同じ箇所から取水したことが想定される。時代を経ても幹線からの取水口は同じであると考えられ、幹線の利用に規制が存在した可能性を示唆する。

今回の調査では中津城下町遺跡の歴史を考える上で数多くの貴重な資料を得た。今後、御水道遺構を含め中津城下町の実態解明に期待したい。

以上、中津城下町遺跡24次調査の発掘調査成果とその意義を述べ、総括とする。



第16図 御水道の分布

(参考文献)

中津市教育委員会「3. 御水道について」「中津城下町遺跡殿町地区」中津市文化財調査報告第32集 2004

第1表 出土遺物観察表

遺物番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
			器高	口径	底径		絵付軸葉	文様						装飾特徴
								内	外					
1	S1	磁器・皿	2.2	8.8	29	叩付・透明釉	内	赤	底面に砂目痕		持家後半			
2	S1	磁器・碗	2.17	13.29	19.70	叩付・透明釉	高台外・二重線脚 外底・裏			横濱	持家後半			
3	S1	陶器・楕鉢	8.75			叩付	裏脚						口縁段状土着	
4	S2	磁器・ままごと道具(碗)	1.4	4.0	1.6	型打	白磁・透明釉		底面に磨痕		持家後半			
5	S2	磁器・小皿	0.73			不明	叩付・透明釉	外・黒色						
6	S2	磁器・小皿	0.73		14.0	叩付	見込(表)の色絵、二重線脚 外底・底、表の絵 高台外・二重線脚 外底・裏脚、脚口(形成口)型			押印			反転底面 大明文化早期	
7	S2	磁器・小皿	0.99	10.0		叩付	叩付・透明釉	内・不明文 外・赤、黒線			不明		反転底面 焼成痕	
8	S2	磁器・皿	2.2	14.25	8.25	叩付	叩付・透明釉	内底・両方脚 内・花、唐草 外・唐草 外底・裏脚	高台底面に輪刻子		持家後半		反転底面	
9	S2	磁器・皿	3.0	29.0	13.8	叩付	叩付・透明釉	内・赤、二重線脚 外底・底、裏脚	高台底面に輪刻子		持家後半		反転底面	
10	S2, S7	磁器・皿	3.9	12.7	10.9	叩付	叩付・透明釉	内・花唐草? 見込・二重線脚 外・唐草			持家後半		反転底面	
11	S2	磁器?・碗	3.0	13.6	14.0	叩付	不明?				不明		反転底面	
12	S2	磁器・碗	4.3	8.0	3.0	叩付	叩付・透明釉	外口縁・両方脚 脚に磨痕 高台外・二重線脚	高台内底面に砂目痕		不明			
13	S2	磁器・火入れ	8.0		9.0	叩付	叩付・透明釉	内・磨痕、二重線脚、不明文 高台外・磨痕	高台内底面に砂目痕		持家後半			
14	S2	磁器?・器種不明	2.08		9.25	叩付	透明釉?		高台底面に輪刻子		不明		反転底面	
15	S2	磁器?・碗	8.25	10.0	最大径10.1	叩付	透明釉・白土				不明			
16	S2	磁器?・鉢?	6.2	18.25	5.8	叩付	不明・白土				不明			
17	S2	陶器・鉢	7.5	28.4	17.0	叩付	磨削受付	内・花文? 二重線脚	口縁 底面に					
18	S2	磁器・香炉?	2.4		8.0	叩付	透明釉		脚付 器入		不明		反転底面	
19	S2	陶器?・器種不明	19.8			型押	透明釉	外・型押、菊文						
20	S2	陶器・人形(獅子の尾)	8.8	幅5.4 高さ2.0		型打	赤色顔料塗布						22と同一個体か?	
21	S2	陶器・ままごと道具(徳利)	3.7	8.8	3.0	型打	叩付・透明釉	外・草草?	裏入	底面に磨痕	不明			
22	S2	陶器・人形(獅子の足?)	2.4	幅1.9 高さ1.0		型打	赤色顔料塗布						20と同一個体か?	
23	S2	陶器・楕鉢	9.1		9.70		磨削しめ、鉄輪				不明			
24	S2	陶器・楕鉢	12.8		9.70		磨削しめ							
25	S2	土師質土器・皿	1.8	11.25	8.25	叩付	磨削しめ				不明		反転底面	
26	S2	土師質土器・皿(灯明皿)	1.7	13.4	8.4	叩付					不明		口縁部2箇所×4箇所 外底・裏脚と7箇所 反転底面	
27	S2	金属製品(銅?)・匙	長さ6.1 幅0.9										長さ73.2g	
28	S2	銅?・椀型押?	長さ6.3 幅7.1										長さ11.0g以下の砂粒を含む 0.5mm以下の砂粒と少量含む 長さ73.2g	
29	S2	ガラス?・器種不明	13.65										反転底面	
30	S2	石製品・石うす	7.1	141.5	135.3								長さ37.2g 幅材の支片痕、磨削痕あり	
31	S3	遺棄器・坏身	11.9		9.0									
32	S3	磁器・碗(小車)	4.4	18.0	13.0	叩付	叩付・透明釉	内・黒色?カ	フロッピー 印付	口縁と両内底面に輪刻子			反転底面	
33	S3	磁器・皿	2.8			叩付	叩付・透明釉	内・花?カ・二重線脚 見込(表)の色絵 外底・草草? 外・唐草、磨削しめ 外底・裏脚、脚の跡	高台底面に砂目痕	横濱				
34	S3	磁器?・不明	2.4	幅14.0		叩付?	透明釉? (不明?)	外・黒色	型押					
35	S3	磁器・碗	2.4		5.4	叩付	叩付・透明釉	見込(表)草草 内・二重線脚 外・磨痕 高台外・二重線脚 外底・磨痕、脚(大明文化?) 外・磨痕 高台内・二重線脚 外底・裏脚	フロッピー 印付(不明)	高台底面に輪刻子、 砂目痕	持家後半		反転底面	
36	S3	磁器・碗	2.73		4.4	叩付	叩付・透明釉	内・赤、黒、二重線脚 外底・磨痕、脚(大明文化早期)	見込(表)の色絵/輪刻子 高台底面に輪刻子				反転底面	
37	S3	磁器・茶臼	3.6	17.4	4.2	叩付	叩付・透明釉	内・草草、磨、二重線脚 外底・磨痕、脚(大明文化早期)	見込(外縁部)に磨削しめ		持家後半?		反転底面	
38	S3	磁器・瓶	8.75		17.4	叩付	白磁・透明釉						反転底面	
39	S3	陶器・碗	2.59		5.4	叩付	透明釉							
40	S3	陶器・楕鉢	11.1		9.70		磨削しめ、鉄輪							
41	S3	土師質土器・楕鉢?	8.25		9.70								内・外面に火打着 外底に磨削痕あり 反転底面	
42	S3	土師質土器・不明	6.75		13.5						型打		長さ7.8g 文部	
43	S3	土師	長さ5.5 幅大径1.1											
44	S3	軒丸瓦	長さ18.9 幅12.6	高さ厚1.5	隅丸数17								右→左	
45	S3	土製品・炭材?	長さ8.1 幅0.8	高さ0.25	不明								長さ47.7g 幅材の支片痕、磨削痕あり	
46	S5	磁器・皿	2.7	33.0	7.1	叩付	叩付・透明釉	内・磨痕、草 見込(草)	両面高台	見込(表)の輪刻子 外底・脚の輪刻子	持家記			

第2表 出土遺物観察表

遺物 番号	出土 遺構	器 種	法量(cm)		成形	装 飾			底面 内底	製作法	製作年代	備 考	
			器高	口径		底径	絵付輪葉	文 様					
								雲母片埋					雲母片埋
47	S5	磁器・小杯	4.3	6.6	2.8	1770	絵付・透明釉	外・濃緑 高台付紐・二重線	高台底面に輪刺す				
48	S5	磁器・碗	(4.0)	9.0	3.0	1770	色絵・透明釉	内・濃緑 見込：菊 外・白、玉引文、濃緑、二重線	色絵(青・ 紅・緑)	高台底面に輪刺す	19世紀前半	反転直元	
49	S5	磁器・碗	5.8	10.2	(4.0)	1770	絵付・透明釉	内・青、濃緑 見込：玉引文、 外・黒・紅、白、不明文、濃緑、二 重線 高台付紐	高台底面に輪刺す		19世紀	反転直元	
50	S5	磁器・碗	6.1	(10.0)	3.8	1770	絵付・透明釉	内・五重線、濃緑 見込：黄 外・黒・白、不明文、 高台付紐	高台底面に輪刺す		19世紀	反転直元	
51	S5	磁器・蓋	2.6	7.4	つば径 2.7	1770	色絵・透明釉	外・紫絵(家内屋敷)文、不明文 内・二重線、外・大文、紫	色絵(青・ 黄・緑・金 赤・黒)		肥前	1710~1740 中?	
52	S5	磁器・帆塙立	4.1	4.9	4.2	1770	透明釉		内側に縁 部に片付	底面・無飾	肥前藩	19世紀代	器の内側に縁の痕あり
53	S5	磁器・碗	6.2	13.2	6.1	1770後型打	青磁	内・型打による華紋の文様	口縁部は 玉引文の 輪花				輪花明色緑色で、内外底も青い
54	S5	陶器・壺	(13.0)			1770	黒磁土						
55	S5	陶器・鉢(片口)	8.1	23.1	9.4	1770	鉄釉	底面 黒塗	見込：紫の片輪刺 す、赤の目 底面：赤の片輪、濃緑				
56	S5	陶器・播鉢	11.1	28.0	(12.0)	1770	鉄釉		見込：濃緑、シロク の付着痕あり				反転直元
57	S5	陶器・火入れ?	(11.1)	(16.0)	1770	鉄釉	外底面へ凹型工及び上方の 縁部を施す、各面に凹工の 痕跡を有す	底面外縁部：紫絵 の付付					反転直元 陶器(火入れ)
58	S5	瓦質土器・火鉢	18.0	21.0	(20.2)	1770		体部中央、山比松の型文	体部中央 の両側 筋文は 獅子巻の 筋文文				一反転直元
59	S5	土師質土器・コンロ	(18.0)	21.0	18.4	1770	黒磁土			底面・赤印 の付付、底面付付			
60	S7	磁器・小杯	12.0	8.0		1770	絵付・透明釉	外・黒文、濃緑	コンロ印 の付付		不明		反転直元
61	S7	磁器・小杯	12.0	8.0		1770	絵付・透明釉	外・紅、濃緑2本	コンロ印 の付付				反転直元
62	S7	磁器・皿	(4.0)			1770	絵付・透明釉	口縁部：不明文あり 見込：二重線、濃緑 外・濃緑、二重線 外底：濃緑、紅、玉引文				19世紀後半	
63	S7	磁器・皿	3.8	(4.0)	4.0	1770	絵付・緑釉	内：不明文	見込に紫の片輪刺す				高台の片輪がへられ、器全体 が傾いている
64	S7	磁器・皿	2.3	(4.0)	9.3	1770	絵付・透明釉	見込：赤絵、太い濃緑 外・赤、玉引文、濃緑	高台底面に輪刺す				反転直元
65	S7	磁器・皿	3.1	(4.0)	9.0	1770	絵付・透明釉	見込：甲斐文字、外・濃緑 高台付紐	高台底面に輪刺す				反転直元
66	S7	磁器・皿	(1.8)		12.7	1770	絵付・透明釉	見込：海防旗 外・濃緑、赤、二重線 外底：紅(足裏赤)	高台底面に輪刺す			19世紀~	
67	S7	磁器・皿	1.9	11.2	6.5	1770	絵付・透明釉	内：型打、赤・緑刺す 見込：不明 外・濃緑、二重線 外底：二重線	高台底面に輪刺す 高台外縁部に赤目 筋				
68	S7	磁器・碗(小杯)	4.4	8.0	3.1	1770	絵付・透明釉	外・濃緑文、濃緑					反転直元
69	S7	磁器・猪口	(5.3)		4.6	1770	絵付・透明釉	外・濃緑、濃緑 外底：紅(足裏赤)	高台底面に輪刺す				反転直元
70	S7	磁器・蓋	2.1	13.0	(13.0)	1770	絵付・透明釉	外・赤文	口縁部に輪刺す				反転直元
71	S7	青磁・皿	5.2	27.2	(16.0)	1770	青磁	外・濃緑			肥前	1600~1630年 代	
72	S7	磁器・火入れ	8.8	11.3	7.2	1770	絵付・透明釉	外・二重線、濃緑、赤、 高台付紐	外底下部に紫の片輪刺 す、筋上付あり	高台底面に輪刺す			
73	S7	磁器・瓶	(7.0)			1770	絵付・透明釉	外・赤文					内底に透明釉の痕れがある
74	S7	陶器・小杯	4.4	(7.0)	2.8	1770	絵付・白土	外・濃緑文	高台底面・濃緑		不明		
75	S7	陶器・小杯	4.9	7.8	4.0	1770	黒色釉		高台底面に輪刺す				
76	S7	陶器・碗	(5.0)			1770	透明釉	外・濃緑 内・黄丸	高台底面に輪刺す				
77	S7	陶器・碗?	5.8	10.8	10.1	1770	黒色釉		高台底面に輪刺す				反転直元 約1/3部分欠損
78	S7	陶器・瓶	(5.0)		10.0	1770	鉄釉		高台底面に輪刺す				約1/3部分欠損
79	S7	磁器・瓶	(8.7)		4.8	1770	白磁・透明釉		高台底面に輪刺す 高台内側に赤目筋				反転直元 内底透明釉の一部は赤色あり
80	S7	陶器・皿	1.9	(11.0)	18.0	1770			高台内側に赤目筋				反転直元
81	S7	陶器・鉢	(4.0)			1770	黒磁土						口縁部に赤目筋あり
82	S7	陶器・器種不明(底面)	(5.0)			1770	黒磁土						
83	S7	陶器・器種不明(底面)	(6.0)			1770	透明釉						
84	S7	陶器・片口?	7.4	(10.0)	3.5	1770	鉄釉?		筋付に輪上付		不明		
85	S7	陶器・鉢	8.0	(16.0)	(12.0)	1770	黒色釉	外底面、上段~中段縁方向に小 びら、上段縁の内、凹縁あり	筋付あり				反転直元
86	S7	陶器・片口	10.4	20.3	9.0	1770	透明釉	内・外上段、白土 透明釉 内上段~外・鉄釉	内側、外側		肥前	19世紀前半	口口部(内)に光潤
87	S7	陶器・蓋	1.8	(11.0)		1770?	内外・鉄釉と鉄釉 外・白土の埋込	外・紅塗の彫り花と片輪	大小の穴 あり				
88	S7	陶器・播鉢	(5.1)			1770							
89	S7	陶器・播鉢	(6.0)			1770							口縁：濃緑 外底：濃緑5本
90	S7	陶器・播鉢	(11.1)			1770							
91	S7	陶器・壺	(6.0)			1770	ワラ反刺す						
92	S7	陶器・壺	13.9	(12.0)	(13.0)	1770	鉄釉	内・赤、赤					反転直元
93	S7	陶器・壺	(12.1)			1770	透明釉(鉄釉)	内：筋子刺すあり					
94	S7	土師質土器・皿	1.6	9.2	7.2	1770			筋付~凹型				19世紀

第3表 出土遺物観察表

遺物 番号	出土 遺構	器 種	法量 (cm)			成形	装 飾			底面 内底	製作地	製作年代	備 考
			器高	口径	底径		絵付軸差	文様	装飾特徴				
95	S7	土師質土器・皿	1.6	9.0	7.8	口内				→内面中央			内面一部、外面中央に赤土付着
96	S7	土師質土器・片口	0.00			口内							口縁部・胴文 外面・裏面赤土
97	S7	軒丸瓦	瓦当径 16.0	筒縁幅 2.0	瓦当厚 2.2	珠文数 10							左三つ巴
98	S7	軒丸瓦	瓦当径 15.7	筒縁幅 2.3	瓦当厚 2.4	珠文数 20							左三つ巴・珠文15個+
99	S7	鬼瓦	瓦当径 (18.7)	瓦当幅 (14.0)	瓦当厚 4.0								
100	S7	軒平瓦	瓦当幅 5.2	文様幅 幅 3.1	筒縁幅 1.5								
101	S7	石製品・茶臼	11.8	22.0	22.0								腹に16輪、2層 石付・表面黒ず 反転面底
102	S7	基石(黒)	厚さ 09.40	底径 12.00									
103	S7	基石(黒)	厚さ 9.2	底径 7.1									史料
104	S7	骨製品?ブラシ	長さ 05.0	幅 1.5	厚さ 0.5								
105	S6	陶器・皿	0.30								肥前産	1000~1800年 代	
106	S6	磁器・香炉?	8.1	109.40	60.0	口内	透彫飾						反転面底
107	S6	磁器・碗	05.10		16.0	口内	透彫飾	外・筒縁の透彫	外面に型 打				反転面底



調査区全景 (北東から)



調査区全景 (西から)



S-1 (南から)



S-2 (南から)



S-3 (左) と S-6 (右)
(東から)



S-3検出状況 (西から)



S-3完掘状況 (西から)



S-3木柵①と石 (東から)



S-3木柵①と石 (上から)



S-3木柵①と石 (近景)

写真図版4



S-3木構② (西から)



S-3木構② (上から)



南北ベルト東壁 (S-6埋土)



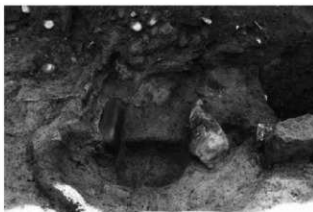
S-6竹管跡



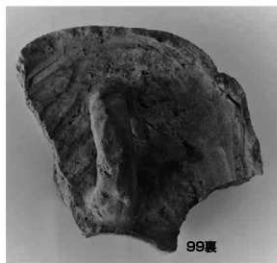
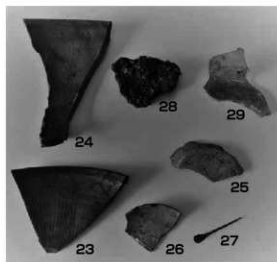
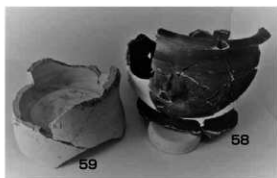
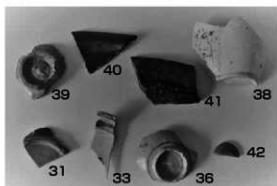
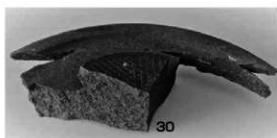
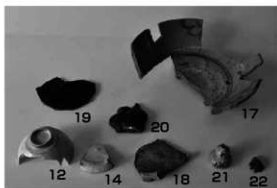
S-6完掘状況 (西から)



S-7完掘状況 (南から)



S-10 (西から)



報 告 書 抄 録

書 名	中津城下町遺跡 24 次調査							
副 書 名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	中津市文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第 103 集							
編 集 者 名	浦井 直幸							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒 871-8501 大分県中津市豊田町 14 番地 3 TEL : 0979-22-1111							
発 行 年 月 日	2021 年 3 月 19 日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中津城下町遺跡 24 次調査	大分県中津市字新博多町 1720 番 1	44203	203002	33° 36' 7"	131° 11' 12"	2014.02.24 ～ 2014.03.14	80㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中津城下町遺跡 24 次調査	城下町	近世	土坑・溝状遺構	陶磁器		18世紀後半以降の火災 処理土坑、水道遺構を 確認した。		
要 約	火災処理土坑・水道遺構などを確認した。水道遺構は底面に竹・木束を埋設していた。2条並 行して確認され、一方は17世紀前半に埋没し、一方は18世紀後半以降に埋没したことがわかっ た。							

中津城下町遺跡 24 次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第 103 集

2021 年 3 月 19 日

発 行 中津市教育委員会

印 刷 高橋印刷所